

FFGビジネス
コンサルティングの

釣道

ちょっと
つりみち

[シン・熊本の港湾 黄金のグチ編]
Vol.14



①夕日に映える島原半島 ②黄金色に輝くグチ(イシモチ) ③見事な三日月に見惚れる筆者

「山路を登りながら、こう考えた。中略」とかくに人の世は住みにくい。」文豪・夏目漱石の『草枕』の有名な冒頭。漱石は熊本での英語教師の頃、郊外的小天温泉を訪れた経験を基に『草枕』を執筆したといえます。

熊本といえば九州観光の目玉です。阿蘇などの山や、天草の海などメジャーな観光地ばかりですが、この小天という地名は馴染みが薄いかも。この地域は九州自動車道から距離もあり、どちらかと言えば知る人ぞ知るところかもしれません。

しかし最近是有明海沿岸道路が開通し、福岡県南西部から熊本県北西部までスムーズに移動できるようになりました。荒尾から長洲、岱明と直線で玉名市へと走り抜けると正面に美しい台形の山麓が目に入ります。これが草枕にも出てきた山々で裾野は島原湾の海岸線まで拡がり干拓地の平らな地形に起伏を生み景観にアクセントを与えています。

この道は通称「県道1号線」と呼ばれ手軽なドライブコースとして地元の方から親しまれています。平坦な道は右手に島原湾を見

下ろす高さまで登り、クルマを停めて西の海を臨むと対岸に雲仙岳の山容が夕日に照らされ、「こんな美しい景色がこんなところに！」と意外な景観に驚かされます。眼下には海岸線から突き出す人工島、熊本新港が目に入り、さらに下ると大河・緑川の河口に到達します。

熊本新港は遠浅の島原湾に大型船が着岸できる施設として築かれた人工島で、島原とをフェリーで結ぶ海上交通の要衝です。この地域は、九州の脊梁山脈の滋養を集めて島原湾に注ぐ白川と緑川という大規模河川の河口域に挟まれ、巨大な構造物が海上に建設されたことによる潮流への影響で生物学的な多様性が生まれ、巨大に育つ有明スズキという固有な亜種を育んでいます。有明スズキは国産のスズキと外来種が交配して大きくなる魚ですが、狙うには危険を承知で広大な河口に立ち込み攻めねばなりません。河口に立つと、月是对岸の宇土半島に落ちかかり、水面は盛り上がり水面に小魚が飛び跳ね、時折り捕食音も聞こえます。

静かに潮が満ちゆく水面はさざ波に揺れ、オレンジ色に輝く三日月の光が宇土半島を照らし水

面に光の帯を差し掛けます。川に立ち込むのは気のりせず、頼りない灯りが燈る栈橋からルアーを投げていると、満ち潮で張られた釣り糸に違和感を感じました。

竿をおり、魚の顎にヒシッと針をかけます。30cmくらいの金色が混じった体色の魚が暴れています。しかし水面に飛び出したり最後の抵抗をするわけでもなく寄ってきたのはスズキのシルエットにも似たイシモチ。この魚はグウグウと鳴くためグチと呼ばれます。そのグチの中でも島原湾一帯で金グチと呼ばれ特に美味しいと珍重される魚が釣れました。

既に月は沈み常夜灯も消え辺りは静寂と闇に包まれ始めます。グウグウと金グチの鳴き声だけが響き、対岸に暗く雲仙普賢岳のシルエットが浮かび上がるのは古来からの情景かと想いを馳せます。熊本新港や有明スズキも、近代の歴史からのもので、ここ数十年で建造され、移植され交配し定着してきたものにすぎません。

文豪も所縁あるこの「1号線」沿い。この道を行きついたら、世のしがらみを忘れ、なにか感じ入ったり、心に残る発見があるかもね(笑)